ねぼけた世界

いしい しんじ

長編の冒頭はいつも起き抜けに書く。正確にはふとんの上、完全に目ざめてもいないし眠ってもいない、半睡状態の頭に、夢でも現実でもない、あたらしい世界が浮上する。からだのピントがようやく合い、風景が僕のなかに、わき水のようにこんこんとあふれ、あらゆるものを濡らし広がっていく。

小説のことばは、起きているとき、日常で使われることばと、似ているように思えるけれど、成り立ちがまるでちがう。といって、夢と同じでもない。よくいわれることだが、ひとの夢くらい退屈な話はほかにない（例外はあるけれども）。

光と闇がうち寄せ合う、ちょうど中間の領域。波に転がされている貝殻や小石が、砂の上で、いつの間にか、幾何学模様、もしくは文字のかたちをなしている。汀（みぎわ）に立ち、それを見おろして驚きもせず、淡々と「そこにそうあるもの」として書きとめる。冒頭部分はいつも、白いコピー用紙にうねうねと、4Bの鉛筆で書かれる。

ときどき小説が、現実のほうへ「はみだしてくる」ときがある。声明のことを書いたその三日後に、声明の本場である、大原の寺を訪ねることになったり、衝突事故を書いた日の午後、自宅の外壁に、アクセルを踏み間違えた軽自動車が突っこんできたり。小説は、常識ではとらえきれない。ことばで書かれているいっぽう、日常のことばを越えたひろがり、ふくらみ、大きさをもち、僕たちの世界と響き合い、連関し合っている。

ふだん、銘柄や商品名を滅多に書かないのに、気がついたら登場人物が「ラッキーストライク」を吸っていた。珍しいな、とおもいつつ、ふと時計をみると、図書館の閉館時間が迫っている。バスに乗り、市街地に揺られていく。農協前でおりた老人が、ついいましがたまで座っていた席の、赤いものをよくよくみたら、ラッキーストライクのねじれたパッケージだった。なるほど、とおもって気がついたら、乗り過ごしてしまっていた。おりてから、どこだろう、とまわりを見まわしていると、女の子がひとり歩いてきて、僕を指さし、ラッキーストライク！　といった。呆然と立ちつくしていると、うしろから父親がやってきて、さあ行こう、と手をつなぎ、通りすぎていった。うしろをふりかえったら赤いネオン文字が輝いていた。「パチンコ　ラッキーストライク」。現実は小説を書いてみないとわからないとしばしば思う。

プロフィール
1966年大阪生まれ。作家。京都大学文学部卒業。
おもな著書に『麦ふみクーツェ』（新潮文庫、坪田譲治文学賞受賞）、『プラネタリウムのふたり』（講談社）、『みずうみ』（河出書房新社）、『ある一日』（新潮社、織田作之助賞受賞）など。Web上でもエッセイなどを連載。11月29日（土）の民博でのトークイベントにも出演予定。

月刊
みんぱく
11月号目次

1 エッセイ　千字文
ねぼけた世界
いしい しんじ

2 特集 疫病
2 あらたな流行り病のきまぐれに応じる
西浦 博
4 自然界から見る人獣共通感染症
伊藤 公人
6 口蹄疫のパンデミック
野林 厚志
7 アフリカ眠り病と「暗黒大陸」
見市 雅俊
9 種痘により零落した疱瘡の神
寺岡 茂樹

10 集めてみました世界の○○
お棺編
藤本 透子

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
「アイヌ古式舞踊」の多様なかたち
齋藤 玲子

16 多文化をあきなう
世界一美味しい胡椒をもう一度
倉田 浩伸

18 味の根っこ
ミキガック
岸上 伸啓

20 人間学のキーワード
スローフード
松嶋 健

21 異聞逸聞
絵にさわる――“体”で感じるGF絵画の魅力
広瀬 浩二郎

22 制服の世界、世界の制服
白くなくても「白衣」
大谷 かがり

24 次号予告・編集後記